
みなみなみななななみの二次元主義生活及びその周囲の人達の非日常的日常生活

零崎吊識

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

みなみなみなななみの二次元主義生活及びその周囲の人達の非日常的日常生活

【Nコード】

N8441U

【作者名】

零崎吊識

【あらすじ】

日常。その程度は人によって異なります。自分にとっての日常が、実は他人にとっては非日常だったり。他人にとっての日常が、実は自分にとっては非日常だったり。

これは、少し頭の変な14人の哉篠町での日常を描いた物語です。

二次元大好き 皆南七々波（前書き）

ユーザー名は零崎吊識。

何故私がこんな名前なのかは分かる人もいるでしょう。

読みやすくしようと思っ
て行と行の間が3行あいてます。
読みにくかったら、教えてください。調節します。

二次元大好き 皆南七々波

『みなみなみななななみ』とは皆南七々波と書く。

まあ、『だからどうした？何その変な名前？おいしいの？』と言われてしまえば、

『おいしい訳あるかボケえ！！』と言うしかないのだが。

そんなことは別にどうでもよくて。傍観者である俺、ひしきしぜろいら犇軋零苛から言わせればこの女、皆南七々波は、自分が今まであったことのあるどの女より異常過ぎる人間だ。

理由は多々ある。が、これから俺達の生活を見ていく上で分かるだろうから、あえてそこは読者のお楽しみを奪うことはやめておこう。

何せ俺は傍観者なのだから。余計なことはしないさ、よく言われるだろ？

『余計なことをしすぎる人間は命を奪われる』ってね。まあ、これが自分の『よく言われる』ことと、読者の『よく言われる』ことが、上手く一致するかはまた別として。

みなみなみなななみの二次元主義生活及びその周囲の人達の非日常的日常生活。

始まり始まり。

「よーっし！全キャラ攻略うー！！」

ななみなな
々波は布団に仰向けになりながらPFPという形態型のゲームをやっていた。

「やゝ。長い道のりだったよ、うんうん。徹夜して頑張っちゃったよ。命ちゃんみことルートむずかしかったなあゝ。まさかあそこであんな選択するとは。いやゝ、ついかれっちゃったし、いーが良かったーよお」

々波はそう言っただけで眠たそうな目を擦っていた。
PFPの電源を切って目を閉じた。

「14回も友達エンドだったんだからあゝチヨーうれぴー……。あゝ眠い。チヨー眠い。長時間画面見てたから、目がチヨー疲れた。でも命ちゃん、私、先輩のことが…、え…てと、だ…だ…だ…大好きです！」だってえ！かわいいなあもう！！命ちゃん！！俺の嫁！！」

……………何か突っ込むところ多くないか？

今の話を聞くとところ、『命ちゃん』というのは『主人公』より年下の後輩らしい。

そして々波がやっているゲームは間違いなくギャルゲーだ。
男性向けの。

・同じキャラ攻略しようとして14回も友達エンド？そんなギャルゲーあるのか？俺は精々難しいキャラだとしても3回で済むもんだ

が。

「もう、ゼロちゃん。分かってないなあ君は。この命ちゃんはねえ、今までのギャルゲーでも、BEST3に入るくらい攻略が難しいキヤラなんだよ。インターネット上でも命ちゃんの攻略方法は存在してないし、今でも情報交換が多々行われているんだよ」

……それって酷くないか。攻略本とかないのかよ。

「ゼロちゃんの馬鹿ちゃん。0と1に還元されてしまえ。攻略本なんて読んだら萎えるだろーが。自分の実力で落としてこそそのギャルゲーだろう？そこが一番の醍醐味じゃねえか。違うか？」

……口調が変わった。軽く罵られたぞ。いつものことだけど。

『違うか？』なんて言われても、俺はあまりそこまで深いギャルゲーに入ったことなんてなかったからなあ……。俺がやるギャルゲーはそこまで難易度高くなかったし。

「インターネットの奴らもあえて攻略本を買ってないんだぞ。分かるかオイ？そりゃあインターネットで既に検索しているところで駄

目かもしれないがな、だからこそ断片的な情報で頑張ってるんだぞ」

無い胸を張って言った々波には悪いがスマン。1つ疑問がある。

：それ、どんなギャルゲーだよ？

「『STEAL HEART』っていう対象年齢12歳のゲームだよ。ほら」

そう言って々波は近くにあったゲームの説明書とパッケージを俺に渡す。

目を閉じているのによく取れたな。

イラストは共通で、桜の木の下で1人の女の子がこっちに手を差し伸べている。

しかし考えてみると『STEAL HEART』って…。

- 1、心臓を奪う
- 2、心臓を奪え
- 3、心を奪って

の3つの解釈の内にあるよな。まあ確実に3だろうけど。そういや、このゲームのメインヒロインって何人だ？

説明書をぱらぱらとめくる。
キャラクター紹介欄は最後のページにあった。
なになに…

主人公に思いを抱く幼馴染、その幼馴染の妹、電波少女、記憶喪失の少女、ボーイッシュ、男性恐怖症、天才ちびっ娘、天真爛漫関西娘、天然少女、ツンデレ、ヤンデレ、クーデレ、主人公大好きっ娘、良妻賢母なおしとか娘、毒舌少女、ゴスロリ、主人公を慕う病弱な娘、好奇心旺盛娘、アルバイト仲間、義理の妹

WOW！こりやすげえや。萌えの集合体、みたいな？
……ってちよつと待てや。

：メインヒロイン20人とか多過ぎるだろ。会話に困るんじゃないの。ごちゃごちゃしすぎて。

「うん。だって自分が選んだヒロイン以外全員死ぬもん」

……はい？

「だから、死ぬの。最初に変態親父が死んで、後々選択肢が出まくるからその選択肢によって死んでいくメインヒロイン、生き残るメ

インヒロインが決まるの。何気に友達が生き残るんだよね。それが繰り返されて最後に一人だけ残り、その人と主人公は結ばれるってこと。友達が最後に残ってるなら友達エンド。そしてこのゲーム、結構理不尽なデッドエンドやバッドエンドが多いの。だから難易度高いのよ、全員」

説明を聞いて俺が思ったこと。

これ、対象年齢12歳じゃダメでしょ。メインヒロインが死ぬとか、完璧に17禁ゲームだよ。

しかも何その展開。どんな場面でメインヒロイン達が死ぬ立場になるんだよ。

俺さ、感情移入が人より恐ろしいほどあるんだよ。

そのメインヒロイン全員救おうとして二次創作書きそうだよ俺は。何でこんなゲームがあるんだよ。

ていうか、難易度高いの当たり前だわな、そりゃあ。

：やってて気分悪くならないか？メインヒロインが死ぬなんて。

「大丈夫。私が腐れオタクだとしても二次元と三次元の違いは分かるわ。三次元にあるのは絶望と虚無だけ、二次元にあるのは希望と達成」

…それって偏見と言うものではないか？まあ嫌いじゃないが。
どうせ絶対的に正しいモノなんてない。

『あるのなら、キモい』
と忒式^{にじき}ならエゴるだろう。

…まあ、俺には絶対無理だな。感情移入がすごいから。

「うん、私もそう思う。ゼロちゃんってさ、『機械に心なんてない』
っていう人がいたら、有無を言わさずぶん殴るよね」

…武 神姫やってたからな。仕方がない。

「うんうん、分かるよ。私もあれは大好き。スキスキダイスキアイ
シテルーってな感じ」

『スキスキダイスキアイシテルー』ってどんな感じなんだか。
々波はさつきから両目を両手に当てている。相当疲れたんだろうな。
今日は土曜日、高校3年生である俺は学校記念日でお休み。
暇だから々波の家に遊びに来た感じた。

々波の部屋は散らかっている。
だがそれは決して部屋が汚いという訳ではなく、
アニメのCDやフィギュアが部屋の隅から隅まで並べられていたからである。

「ゼロちゃんさ、もうすぐ高校とお別れだね」

不意に々波は口を開く。

・馬鹿。まだ5月だろうが。卒業式には程遠いわ！

「でもさでもさ、どうどうどう？お別れの時って感じる？悲しい？」

・まあな。お別れの時が近づいていることは最近よく感じるよ、3年生になってからな。悲しいなんて微塵も思わないが。

「え？そうなの？学園ドラマとかだと全員卒業したくないとか言っ
て涙流すと思うんだけどなあ」

：だってそりゃあ作りものだろ。高校生活なんてひたすら勉強勉強勉強、ただひたすら退屈な毎日がこつた返すだけだぜ。大人によくいるんだけどさ、高校生のころに戻りたいなんてよく言うけど、今の大人ってのは勉強と退屈が好きなのかね。

「さあ？分からないね。だって私大人じゃないし」

そりゃあそうか。

人の心なんて誰にでも分かるもんじゃないし、ましてや大人の心情なんて分かるものか。

「ま、私も悲しいとか思わないね。逆に早く卒業したいよ。ウチのクラスリア充ばっかりだもん。別にそれが嫌いとかじゃなくてさ、^{フレンド}同士がいらないからつまんないのよね」

：別にいいじゃん。^{たかし} 皋さんとか孤道さんとか、^{フレンド}仲間ならいっぱい
るぜ。

「そうなんだけどさ。2人とも私達より年上でしょ。同級生の同士フレンドがいない問題よ。ゼロちゃんと私は高校違うし。終日姉妹ひねもすがいるのは嬉しいけど、同士フレンドって感じじゃないからね」

：そんなもんか。

「そんなもんよ」

どう違うんだろうな。

「拒否する二次元」の々波に、「容赦なき優柔不断」のこのみに、「無邪気スクレーパー」のきのみ。

どれも『異常』と言うタグで囲まれてしまつのに。フレンドそういう意味では3人とも同士だと思いが。

あ、いや違うか。

々波が言ってるのは同士フレンドだもんな。

で俺が言ってるのは仲間フレンド。

似て非なるものってこういうことか。

勉強になったわ。

：々波、そのゲーム、今だけでいいから貸してくれないか？

「うん？……うん。いいよ。新しいセーブデータを作ってプレイしてね。た・だ・し。理不尽な選択肢があるからよく気をつける様にね」

：へいへい分かりました。

差し出されたPFPに電源をつける。
新しいセーブデータでプレイする。

『俺の名は御神憐^{みかみれん}。何処にでもいるごく普通の高校一年生だ』

画面は暗い。いや、黒い。
表示されているのは下にある文字だけだ。だが中々いい出だしで面白そうだな。

『何故か俺は恋愛というものに縁がなく、物悲しかったりする。だが俺は……』

……ん？

『1、別にそんなことは気にしない』

『2、別にそんなことどうでもいい』

………待てや。

：おーい、々波。 何だかいきなり変な選択肢 k t k r

「あ、それ。 それね、このゲームで一番大事な選択肢だからね氣をつけて。 間違った方を選ぶとどのキャラ攻略しようとしても、主人公がエンドの時に義理の妹殺して自殺するから」

：こんなどうでもいい同じ様な二択でプレッシャー重っ！どんな神経してんだよこのゲーム作った奴は！

何でこんな二択で間違ったら自殺しなくちゃいけないんだよっ！！

「ねー、だよねー。だから私もチヨーびっくりしちゃったよ。でもこのゲーム、妙に豪華声優陣なんだよねー。ぶったまげちゃった」

俺もぶったまげたよ。

お前がこのゲーム持つてて。

買う時脳みその反射神経でも鈍ったか？

「ヒント教えようか？」

：あるんならぜひ教えてほしいよ。こんな二択でバットエンドなんてむかえたくねえや。ごめんこうむるぜ。

「1番目の選択肢を選べばいいよ。このゲームはね、いわゆる俺様キャラが何故かどんどん真っ先に死んでいくんだよ、悪友も先輩もだから似てる選択肢があったら、より草食動物系な選択肢を選べばいいよ」

：サンキュー。

1 番目の選択肢を選ぶ。

『別にそんなことは気にしない。そんな人生もそれはそれで楽しいことはあるだろう。誰の人生も幸あるとは限らないし』

結構コイツ、ネガティブ思考なヤツだな。

いや、俺もこの主人公も変わったもんじゃないか。

別に現実逃避ではなく、自分の力量を知っている。夢が儚すぎることを知っている。

だからどちらかという根っからの現実主義だ。

『そんな若干のネガティブ思考の俺でも構ってくれる奴はいる訳で』

『それが俺の幼馴染、鶴来小春だ』

そうしてプレイすることなんと7時間……

俺は泣いていた。

・うおおー！感動しまっじやねえかこの話！！なんで幼馴染ってこんなに儚いもんなんだろうなあ畜生！！

「どうだった？誰エンド？」

々波はすっかり目の調子が良くなったのか、PFPの画面を覗き込んでくる。

「おお、小春エンドか。最初でこの子を攻略するのって、結構大変なんだよ。選択肢を1つでも間違えたら死、あるのみだからね。だって相手は釘バットを持ったヤンデレだし？幼馴染と主人公がそいつに立ち向かうっていうところがいいんだよね。最後主人公がヤンデレに向かって『悪いけど、さようなら』っていうところ、シンプルで（E）いいよね」

：結構深いな…。幼馴染がヤンデレの女に立ち向かうところなんてもう涙腺がヤバかったぜ。ストーリー性はもうヤバいな。(E)ぜ。

「すっかりハマったみたいだね。うふふん。でもさあ…じ・か・ん大丈夫なのかなあ？」

々波に言われて、壁にかかっていた時計を見る。

…時！？マジかよオイ！？

無乃^{なの}がご飯作って待ってる頃じゃねえか！！

俺は足元にあるフィギュアやCDを踏まないように足元に気を配る。

：悪い々波！俺そろそろ帰るぜ！！

「どつぞ〜」

人が大慌てで変える準備をしているのにも関わらず、呑気な声色の々波だった。

畜生！

ヤベえヤベえヤベえ！

々波に言われて持ってきたアニメマガジンをバッグに入れて部屋を出る。

「あら、ゼロちゃん。もう帰っちゃうの？」

階段を下りたところで々波の母、々なななわ縄さんに出会った。
いやいや、もうって言ったって約7時間もここに居たんだから。

…はい。名残惜しいですが。また来ます。

「今度は無乃ちゃんも連れてきてね」

…家族揃って呑気な声色だった。

二次元大好き 皆南七々波（後書き）

誤字や脱字、文法の間違いなどがあつたら、教えてください。
よろしく願います。

ちなみに次回は、ブラコンの妹が登場します。

超ブラコン病 犇軋無乃（前書き）

追試が1つあった零崎吊識です。

更新が遅れて申し訳ございませんでした。

超ブラコン病 犇軋無乃

昔よくやっていたことが今ではやってはいけない、というのはよくあるもので。

それは例えば。

戦争。スパルタ教育。警察がよくやっていたと言われる強制的な自白。

それをやれば勿論、警察に捕まってしまう訳で。

本人の故意ならともかく、巻き添えを食いたくないものだ。

だが俺の妹はそのことで俺を巻き込もうとしていた。
それは。

血縁関係での、結婚。

犇軋無乃^{ひしぎしなの}、俺を含めた13人はいつも思う。

何故こいつは今この時代に生まれてきたのだろう、と。

みなみなみななみの二次元主義生活及びその周囲の人達の非
日常的日常生活。

始まり始まり。

妹の部屋はプライベートという言葉が通じないほどぐくありふれた
部屋だ。勉強用の机、そこに座るためのイス、そしてベッド。
ただこれだけである。

「おにーちゃん？こーんな夜まで。何処で？何を？していたのかな
あ？」

修羅場だ。ただただ修羅場だ。

今ここで必要なのは事実ではない。
男の意地やプライドを捨ててまでも生き残ること。
ただそれがどうやって、「現代破壊のスレンダー」と呼ばれる犇軋
無乃相手に出来るというのだろう。

…いやあ…そのお…ですね…。

「おにーちゃん」

無乃はそう言っで自分の右足を俺の頭の上に乗せた。
今どんな状況かと言うと。

無乃が女王様の様にイスに座り、その前で俺が土下座をしていると
いう状況だ。

今この状況なら、俺は断言できるだろう。

『俺は日本一威厳のない兄だ』と。

思うと情けない。

思うだけで情けない。

今なら羞恥心で死ねる気がする。

いやもういつそ死んでしまおうか。

もう楽になるのかもしれない。

なんて落観思考はアマゾン川のピラニアにでも食わせておいて。

どうやって俺は明日の日を拝めばいいのだろう。

プルルルル……

不意に部屋の隅に置いてあった電話が鳴り響く。

「チツ…電話かよ。いいところなのに」

何処がどういところなんだよ。

お前にS Mプレイの趣味があつたなんて初めて知ったぞ。
お兄さんは悲しいよ。

「はい、もしもし。 犇軋ですが」

その声は得物を誘う人魚の様に甘く、誘惑的だった。

受話器を握っている無乃の表情は満面の笑みだ。

だが電話相手が誰か分かった途端、無乃の表情が一瞬にして豹変した。

「はい。あ…。んーだよ。てめえかよ。皆南七々波！みなみなみなみなこんな時間に何の用だよ！ああ！？うるせえな、ブラコンとか言ってるじゃねえぞ！事実だけに拒否できねえんだよ！！ああ！？近親相姦の何が悪いってんだ！愛は血縁関係をも超えるんだぞオイ！！」

そんな愛、俺は要りません。

ていつか々波の本名をよく舌をかまずに言えたな。
俺なんてこのまえ舌から血がダラダラ出てきたのに。

「はあ、ギャルゲー？妹のお兄ちゃんがそんなことする訳ねえよ！ああ！？……はあ？な、何だよそれ。意味分かんねえし……。えっ……。そ、そうなんだ……。う、うるさい！照れてなんてねーよバーカ！！」

怒ったり照れたり、感情豊かで結構なことだ。
それは『人間とは本来感情豊かな動物である』という誰かの偉人の言葉を崇拝する訳ではなく。

色々な妹の一面を見てお兄さんは嬉しいということだ。
勿論、変な意味は含んでないデスヨ？
でも何故、無乃は照れているんだろう。怒る理由は聞くまでもなく分かるのに。

もしかして、々波が無乃に告白したとか？
その答えに無乃は戸惑いながらも2人はめぐりめぐり百合の世界へ……。

……まあ、それはないな。自分の妹に何を期待してるんだ俺は。
兄貴失格を超えて人間失格だぞ。

……当たり前のこと、言ってもいい？

絶対々波、俺がギャルゲーをやってたことを無乃に言っただよね？

「ま、まあ……々波、ありがとう」

そう言った無乃の顔はリンゴの様に紅潮していた。

やはり告白されたのだろうか？

と、俺が立ちながらそう思っている時だった。

無乃が受話器を元の位置に置き、こちらを向いた。

橙の瞳は蒼いツインテールの前髪で隠れて見えない。

無乃が首を少し前に垂れているからだ。

何だろう？何をされるんだろう？

『ギャルゲーをプレイした兄が妹に殺された様です』

何だか何処かの動画にでもありそうなタイトル題名だ。

いつもなら笑えるところだが、自分のことなので、洒落にならない。

前略 天国のパパとママ

もうすぐそちらへ旅立つかもしれません。

「おにーちゃん…」

人魂の様に、ゆらーり…、ゆらーり…、と無乃が近づいてくる。
まるで狂気に満ちた殺人鬼の様に。
だが。

「もう！お兄ちゃんってば！照れ屋さんなんだからっ！！」

だが無乃の行動は俺の予想を大きく裏切った。

無乃の声は怒りではなく、どちらかというと歓喜だった。

そして理由がさっぱり分らない俺がなぜこうなったのか考えていた時。

無乃が俺に抱きついてきた。

そしてそのまま力の方向に任せ、床に倒れ込む。

：痛っ！

俺は思わず叫び声をあげた。

後頭部に衝撃が走る。

それでも、無乃は俺に抱きついたままだ。

「飢えてる？ 飢えてる？ 飢えてるんだよねえ？ そうだよねえ、今の世の中、近親相姦は犯罪だもんねえ？ 禁忌タブーだもんねえ？ うふふふふ」

……無乃、お前、恐い。めっちゃ恐いわ。

しかも何を言ってるんだ？ 俺が何に飢えてるって？

「何もギャルゲーで実妹キャラ攻略しなくてもいいじゃん。妹はいつでも歓迎なんですヨ？ お兄ちゃんが一線越えられるなら」

一線を越えて死線に行っちゃいそうだよ。

：お、おい。離れる無乃。お前が何を言っているのか分からん。しかもこの状況を誰かに見られたらどうするんだ！？

「大丈夫。いや、むしろ全国の皆さんに見せつけちゃいましょう。これかもしライトノベル化したら、この場面はきっと挿絵が入っているに違いありません！」

お前は浜木綿えのか！？

いやいや、ツツコミどころはそこじゃなくて。

これがライトノベル化されたらなんて言うか知ってるか？

『世も末』って言うんだよ！

「あ、でもそうしたら日本には住めなくなっちゃうよね。外国にでも行く？」

：勝手に話を進めるなバカ！！

俺は無乃のこめかみを右手で掴み、握った。
そして無乃の顔と俺の顔の距離を離す。

「イタタタタ、割れちゃう割れちゃう割れちゃう！もう、お兄ちゃん容赦ないんだから！ドSだねっ」

…死ねえ！！

俺はこめかみを右手から離れた途端、左手で無乃を殴った。殴られた無乃はそのまま吹っ飛ばされて後頭部を打つ。

無乃は、目が渦巻状になっており、口がポカンと開いている。

…うん、完全に気絶しているな。

よかった、またこれで犯罪者が減った。

日本の平和は守られたのだ！

そういえば。

々波は無乃に何を吹き込んだのだろう、と俺はふと思った。

無乃から電話を借りることにして（本人に許可は取っていないが）、々波に電話をすることにした。

：何だっけなあいつの家の番号。名前と同じなんだよな。えーと、
3 7 3 7 3 7 7 7 7 3 ? だっけ。いや確か…。

誰も聞いていない独り言を言いながら、々波の電話番号を入力する。

ブルルルルル…

「はいもしもし。皆南七々波の母、皆南七々なななな縄ですが？」

：よく舌を噛まなかったものだ。俺には絶対無理。

それとも自分の名前だからこそ、生きているうちにそれに慣れ、平
気になるのだろうか？

慣れって良いものでもあり、悪いものでもあるんだということをよ
く思い知らされる。

いい勉強になったよ。

：もしもし。零苛ですが。々波さん、いらっしやいますでしょうか？

『ええ、いるわよ。そういえばゼロちゃん、そんなに畏まる必要なんてないのよ？もう幼馴染からの付き合いじゃない。普通に夕波でいいし、私に対しても、もう少し甘えてもいいのよ？』

それは、俺にとっては少し嬉しい言葉だった。

別に変な意味は含まれておらず。

さっき言ったかどうかは分からないが、俺と無乃には両親がいない。他界したんだ。俺達が幼い時に、とある事故で。

その時に、俺達の心の支えになったのが、皆南七家である。

…十分甘えてきましたよ。今の今までずっとね。

『そういう甘えじゃなくて、何と言つか……まあいいわ。夕波を呼んでくるから』

そう言つて『木星』の音楽が流れ込んでくる。
やはり『木星』はいいな。

「はい、『木星』に代わりまして皆南七々波、満を持しても持さ

なくとも降臨っ！」

代わって聞こえてきた声は、随分と陽気で無邪気な声だった。

：よお、々波。

『はいはいゼロちゃん、無乃とは死線に辿り着いたかな？』

俺はチラッと無乃を見る。
やはりまだ気絶している。

：いや、死線に行ったのは無乃だけだ。いや、そのことなんだけ
どよ、お前さつき、こっちに電話してきただろ？無乃に何を言った
んだよ。

『ああ、そのことね。いやさあ、何かいやな予感がしたんだよ。』
虫の予感』みたいな』

.....。

虫の予感 ×

嫌な予感、或いは虫の知らせ

気をつけようね、日本語には類義語がたくさんあるんだから。

『何だかゼロちゃんが無乃に土下座して頭でも踏まれてるんじゃないかと思ってね』

『虫の予感』にしてはお前、鋭すぎだろ。

『じゃあ念のため確認しようと思ってさ。無乃の部屋に電話をかけたんだよ。そしたら案の定、私が予想してた展開になってたから』

……お前、見たな？

『うん。ゼロちゃん、土下座してたね。でね、そんなゼロちゃんの痴態を見ていられないから救いの船を出してあげようと思ってサ』

：それで？

『さっき、『ギャルゲーで実妹のキャラを攻略してた』なんて言ったら無乃、どうしたと思う？』

：さっきの行動から考えると……喜んでいたな。でも何でだ？

「今の世の中ってさ、近親相姦は犯罪じゃん。そのことに関しては多分、無乃はゼロちゃんのことを『一線を越えられない臆病者^{チキン}』と思ってると思うの」

酷い言われようだ。

絶対々波、私情を挟んでるだろ。

『だからギャルゲーで実妹を攻略してたら無乃は喜ぶんだよ。だっ

て『近親相姦が罪』でなければ、『ゼロちゃんが無乃を好き』と無
乃は勘違いするからね。仕方なく二次元で満たしているっていう感
じじゃない？まあそれでも、完全に満たされることはないだろうけ
ど。だって一応二次元だし』

「飢えてる？飢えてる？飢えてるんだよねえ？そうだよねえ、今の
世の中、近親相姦は犯罪だもんねえ？禁忌タブーだもんねえ？うふふふ」

さっきの言葉はそういう意味だったのか。
やっと分かった。

：ありがとつ々波。こんなことがまた起きたら、助けてくれよ？

『うんうん、オーケーオーケー。じゃーね』

ブツン、と電話が切れる音。
受話器を元雄の位置に戻し、再び無乃に視線を移す。

.....
.....。

近親相姦、かあ…。

別にそこまでそれを拒む訳じゃない。

無乃がブラコンであるように、俺も少しシスコンなのだろう。

もし、俺達が『近親相姦が当然の時代』に生まれてたら、間違いく一線を越えたことだろう。

それほどまでに無乃は可愛いし、愛おしい。

誰にも渡せないほど、愛しただろう、緊縛しただろう、どんなわがままも聞いてやったことだろう。

でもこんなのは夢幻ゆめはなしでしかない。

結局、何が正しいなんて時代によって変わってしまうのだ。

だから、絶対な正義は無い。

世界は誰にでも不公平だ。

俺達には両親がいない。

そして無乃は心に深い傷を負ってしまった。

だからせめて。

自分の幸せなど、誰にでもくれてやる。

無乃が犯罪に巻き込まれることなく、幸せに生きていてくれれば。

そんなことを考えながら、俺は気絶した無乃を放置して階段を下りた。

…腹減ったなあ…。

今夜はなにを食べるか悩みながら。

超ブラコン病 轟軋無乃（後書き）

ああ…妹がほしいなあ…。

あ、冗談ですヨ？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8441u/>

みなみなみななななみの二次元主義生活及びその周囲の人達の非日常的日常

2011年10月9日04時48分発行